

書史会要「いろは」漢字音注札記

中村雅之

1. 「いろは」の漢字音注

陶宗儀『書史会要』(14 世紀後半)の巻八に見える日本の仮名に対する漢字音注は以下のようなものである。原文の細字注を括弧で示す。下線を付した部分が本稿で問題とする箇所である。

い 以(又近移) ろ 羅 は 法(平声又近排) に 宜 ほ 波(又近婆)
へ 別(平声又近奚近靴) と 多(又近駄) ち 啼(又近低) り 梨 む 奴
る 盧 を 窩 わ 懷 か 楷(作喉音呼) よ 饗(平声) た 大(平声)
れ 俵 そ 座(平声又近莎) つ 土(平声又近屠) ね 尼(縮舌呼)
な 乃(平声) ら 阿頼(頼作平声彈舌) む 謨 う 烏 ゐ 伊 の 那
お 和(又近窩) く 枯 や 爺(作喉音呼) ま 埋 け 茄 ふ 蒲(又近夫)
こ 軻 え 奚 て 悌(平声縮舌呼) あ 挨(作喉音呼) さ 篩(又近柴)
き 欺(又近其) ゆ 由 め 乜 み 皮(又近眉) し 尸(又近時)
ゑ 繫(平声) ひ 非 も 摩 せ 蛇(又近奢) す 疏(又近徂)

これらの仮名と漢字の対音については、小川環樹 1947 および有坂秀世 1950 で紹介検討がなされた。有坂 1950 は、もともとは別の論集のために書かれたもので、1944 年にはすでに稿が成っていたが、その論集が発行中止になったため、1950 年になって『言語研究』に掲載された。そのような事情であるから、小川 1947 と有坂 1950 は互いを参照することなく書かれたが、共通部分も多く、基本的な問題はほぼ論じられている。ここでは「又近」という注釈に関連して、両氏が十分に説明しきれていないと思われる部分について、解釈を試みたい。

2. 「又近」について

この注釈の付された例について、暫時、「い 以(又近移)」と「み 皮(又近眉)」を除外すれば、有坂・小川両氏が論じたように、他の例はすべて明確な原理に基づいている。すなわち、各々の仮名に二種ないし三種の発音があることを示している。

具体的には、「は 法(平声又近排)」の場合、「は」がある時には[ϕa] (法の平声)と発音し、ある時には「ba」(排)と発音することを意味する。以下同様に、「ほ 波(又近婆)」では[ϕo]と[bo]、「と 多(又近駄)」では[to]と[do]、「ち 啼(又近低)」では[di]と[ti]、「そ 座(平声又近莎)」では[dzo]と[so]、「つ 土(平声又近屠)」では[tu]と[du]、「お 和(又近窩)」では[o]と[wo]、「ふ 蒲(又近夫)」では「bu」と「 ϕu 」、「さ 篩(又近柴)」では[sa]と[dza]、「き 欺(又近其)」では[ki]と[gi]、「し 尸(又近時)」では[ji]と[dzi]、「せ 蛇(又近奢)」では[dze]と[je]、「す 疏(又近徂)」では[su]と[dzu]。(ここでの音価はあくまでも暫定的な私案であることを了

解されたい。特に子音の音価については議論を要するが今は措く。)

これらはほとんどが清濁に関するものである。ただ、「へ 別(平声又近奚近靴)」については他のハ行と異なり、三種の音が示されている。つまり、[be]と[e]と[ϕe]である。[e]は、「いへ(家)」「まへ(前)」など、語中の「へ」が[e] (有坂氏は“ye”とする)になるということであろう。

なお、「お 和(又近窩)」について、上では[o]と[wo]とした。有坂氏の解釈はそれとは異なるようであるが、今は深く触れない。

3. 不可解な「い」と「み」の音注の解釈

例外とした「い 以(又近移)」と「み 皮(又近眉)」であるが、まず後者について考えてみたい。有坂氏はこれを「最も難解」としながらも、インフォーマントである克全の方言で「み」を時に [bi]と発音することの反映かと疑った。小川氏も同様である。しかし私は、この部分は他の部分の字句が紛れ込んだ誤記であろうと思う。「み」は普通には[mi]であるから、「み 眉」とあればそれで十分である。では「皮」はどこから紛れたかと言えば、元来「ひ」の下に「ひ 皮(又近非)」とあったものではなかろうか。つまり、現行テキストで「ひ」に清音の「非」のみが記されているのは編纂過程における疎漏であり、もとは「ひ 皮(又近非)」の形で、[bi]と[ϕi]の音があることを示そうとしたのである。ところが、「皮又近」の三文字を誤って「み」の下に混入させた結果、「み皮(又近眉)」という些か思わせぶりの音注が出来上がってしまった。

残る「い 以(又近移)」であるが、有坂氏はこれをアクセントの問題であろうとし、小川氏も日本語の音調を模倣した可能性を指摘するが、ともに詳しくは論じていない。しかしこの音節にだけアクセントのバリエーションが示されるのは他の部分とつり合いが取れない。実はこの「又近移」も本来は「ひ」の下にあったのではないかと私は疑っている。つまり、もともとは「ひ 皮(又近移近非)」とあって、母音間の「ひ」を[i]と読むことを「移」で示そうとしたのではないか。つまり、「へ 別(平声又近奚近靴)」が[be]と[e]と[ϕe]の三音を示そうとしたように、「ひ 皮(又近移近非)」で[bi]と[i]と[ϕi]を示そうとしたと考える訳である。さらに妄想をたくましくすれば、「ひ」の注が「い」の下に紛れ込んだ背景には、筆で書かれた仮名の「ひ」と「い」が中国人にはよく似て見えたということもあったかも知れない。

有坂・小川両氏を悩ませた「い 以(又近移)」および「み 皮(又近眉)」という不可解な注は、本来はともに「ひ」の下にあった注が紛れ込んだものであった。そのように考えれば、「いろは」の漢字音注はかなり整然としたものになる。

<参考文献>

- 小川環樹 1947, 「書史会要に見える「いろは」の漢字対音について」『国語国文』16-5. (のち『中国語学研究』所収, 創文社 1977)
- 有坂秀世 1950, 「書史会要の「いろは」の音註について」『言語研究』16. (『国語音韻史の研究 増補新版』所収, 三省堂 1957)